

## 【書評】

### 服部正治『イギリス食料政策論——FAO 初代事務局長 J. B. オール』

日本経済評論社，2014 年，287 頁

BBC ドキュメンタリーの基礎を作り上げたと言われる映像作家ポール・ローサの『豊かな世界 World of Plenty』（1943 年）を観た。1943 年 5 月から 6 月にかけて、アメリカ合衆国ヴァージニア州ホット・スプリングズで開催された世界食糧農業会議。そこで流された 43 分間の映像である。この会議は、のちの FAO（国際連合食糧農業機関）の土台となるもので、はじめて世界規模で食料問題が論じられたという点で画期となる出来事といつてよいだろう。『豊かな世界』では、食料生産の偏り、食料消費の不均等、ナチスによる食料輸送路の破壊、子どもの貧困や飢餓、など、さまざまな問題が取り上げられながら、「食料—ありうべき未来」という最後のシークエンスで、この会議の理念である世界的規模の食料コントロールの展望が掲げられる。過剰に収穫された穀物の山が価格調整のために燃やされるシーンを、貧困で苦しむ子どもたちのシーンと交互に映し出す演出は圧巻だ。

この映像は、本書（89）に記された紹介を通じて知り、インディアナ大学のメディア・コレクションズ・オンラインで閲覧した。すでにこの会議の 1 年前に、日本軍はミッドウェー海戦で大敗北を喫し、数ヶ月前にスターリングラードの攻防戦でナチスが敗退していたとはいえ、戦後の世界の飢餓撲滅をめぐる、自国の利益だけに拘泥しない理想の追求が語られ、議論もされていたことに驚かすにはいられなかった。本書の主人公、ジョ

ン・ボイド・オール（1880-1971）も『豊かな世界』に出演する。トレードマークのふさふさの眉毛に、細長い顔、そして、広い顎、パイプを吹かせるオールの相貌もさることながら、栄養学者でもある彼が語る理想はとても印象深い——「すべての男女と子供が、彼らの受け継いだすべての〔潜在〕能力を、健康で満足のいく状態に開発させるのに適した種類の食料を十分に手に入れるまでは、…われわれは欠乏からの自由に到達してはいない」（89）。

本書の軸は、FAO の初代事務局長であり、1949 年にはノーベル平和賞を受賞したオールの理想と実践に置かれている。しかし、華々しい経歴とは裏腹に、彼の失意も深い。「第 1 章 第二次世界大戦までのオール」、「第 2 章 第二次世界大戦下のイギリス食料政策論」、「第 3 章 FAO の成立とオール」、「第 4 章 世界食料委員会提案の挫折」、「終章 食料政策論におけるナショナルとインターナショナル」、「付論「自由貿易国民」の興隆と解体」と読み進めるにつれて、理想と背中合わせのようなオールの苦悩を読者は感じるだろう。そして、おそらく、彼の試みを空疎だと断じきれない人々のために、著者はこの書物を執筆したのだと私は思わずにはいられない。

本書は、決して読みやすい本ではない。食料政策をめぐる書物の分析が中心を占め、書物の要約が多く、もちろんそのあとに分析がなされるのであるが、できればもう少しだけ各論者の思想や時代の背景などを注入しつつ

噛み砕いたほうが、飢餓問題を学びたい初学者には親切であろう。また、いくつか誤謬が散見される。たとえば、「市民の健康とモラル」(19)と訳されているのは前後の文脈からしても原語を確認しても「市民の健康と士気」と訳すべきだろうし、熱量の単位として「カロリー」とあるのはすべて「キロカロリー」としないとおつじつまがあわないだろう。

けれども、このような指摘をすることのためにためらいを感じるほど、本書は、近現代史の核となる問題に正面から取り組んでおり、戦争と飢餓の問題に関心をもつ人間にとってとても勉強になる書物である。なによりも穀物法論争を研究しつづけてきた著者だからこそ、近視眼的な問題提起に終わることなく、息の長い、長期的問題提起を行っている。

以下、私が印象に残ったところをいくつか提示しておきたい。

第一に、公平で自由な貿易に依拠しつつも、「ビッグ・ビジネス」と呼ばれる食品企業を世界規模でコントロールしようというオール理想が、とりわけすでに世界規模の食品企業を抱えていたアメリカによって打ち破られていったことである。結局、ホット・スプリングズ会議で掲げられていたようなFAOの権限が大幅に狭められ、もっぱら統計と調査に従事する組織に墮してしまい、「世界食料委員会」というオールの理想としていた超国家的管理組織も企画潰れになってしまったのは、とても重い。世界政府的なものが「緩衝在庫 buffer stock」などを駆使して食料の価格調整を行ない、貧困と飢餓に悩む国や地域を救うことができるのか、という世界史的チャレンジの挫折過程から学ぶべきことは、現在なお少なくないと思うし、飢餓撲滅への共感が国民意識、さらには帝国意識という心性と衝突していく過程での、「モラル」と「エコノミー」の共存と矛盾の描かれ方は、本書の読みどころのひとつと言ってよい。この点、

「オールにあっても、国際的な食料政策実施に当たって帝国は依拠すべき環ではあった」(194)という終章の最後の文章については、もう少し、オール全体の思想の流れとの位置付けを論じてほしいという印象をぬぐえなかった。

第二に、オールの歩んできた道である。スコットランドに生まれ、グラスゴウ大学在学中に「スラムの劣悪な生活状況を調査し、栄養不良状態が後半に存在し、多くの子供がくる病や壊血病などに苦しみ、さらに幼児期の栄養不良がその後の発育を阻害している状態を目のあたりにした」(1)。オールは、卒業後、22歳でスラムの教師に、その後、グラスゴウ大学に戻り、生理学と栄養学を学ぶ。第一次世界大戦期には陸軍軍医官として従軍、兵糧での野菜の重要性について学び、戦後は、フレデリック・ホプキンスのビタミンの発見に触発されて、ビタミン、ミネラルの研究で高い評価をもらい、さらに、エジプト、インドなどの調査で再び植民地での貧困層やグラスゴウのスラムの人々の栄養不良の研究、調査に打ち込んできた。オールの世界規模の理想の背景には、つねに、このような、場合によってはとても身近な、具体的かつ科学的な事実がある。貧困と飢餓の解決の中心が完全栄養食品であるミルクの普及（『豊かな世界』でも頻出する）に向かうのも、グラスゴウのスラムで教師をしたり、調査をしたりするなかで、栄養不足も重要だが、栄養不良も重要であることに気づく体験から来ているという道筋は、やはり、注目に値する。

第三に、近現代ドイツの食料史の史料に頻出する「白パンか黒パンか」という論争が、「パン改革同盟」の設立にみられるようにイギリスでも起こっていたことは興味深かった。オールは、ナチスの全粒粉パン運動を栄養学的観点から注目しているが、「ふすま」や「ぬか」の量の制御は、二つの大戦の重要な生活

史の一面である。また、戦争がもたらした計画経済を活かして世界の貧困撲滅へという「災い転じて福となせ」というオール思考の道筋も、普遍的な問いを近現代史研究者に投げかけていよう。本書でも繰り返し参照さ

れるリジー・コリンガムの『戦争と飢餓』や本書をたたき台としながら、今後、世界食料史の研究がさらに進んで行くことを願ってやまない。

(藤原辰史：京都大学)